

<b>オオバにおける定植前マルチは初期収量を向上し省力的である</b>		
<p>[要約]</p> <p>オオバはマルチを被覆することで初期収量が向上し、マルチの被覆時期により生育に影響を与えないため定植前被覆が可能である。</p>		
茨城県農業総合センター 園芸研究所	成果 区分	技術情報

### 1. 背景・ねらい

本県のオオバは行方市を中心として周年栽培が行われており、全国第3位の出荷額となっている。オオバの収量は土壌の水分状態が関係し、マルチは病気予防に効果が高いという報告がある。慣行の栽培では、マルチを被覆しているところに定植すると生育が悪くなるという理由から、マルチの被覆は定植1ヵ月後に行われている。そこで、マルチの被覆と土壌水分が生育に及ぼす影響と定植前マルチの可能性について検討を行う。

### 2. 成果の内容・特徴

- 1) 定植後2ヵ月目の7月では、土壌の水分状態に関わらずマルチにより側枝は4本程度多く発生するため、初期収量が増加する(図1A)。
- 2) 定植後3ヵ月目の8月では、マルチの有無により側枝の発生に差は見られなくなる(図1B)。
- 3) マルチを被覆する場合、株あたり月平均5Lのかん水で側枝の発生が優れ、土壌の水分状態はpF2.2程度となる(図1B)。
- 4) マルチの被覆時期により側枝の発生および主枝節数に影響を与えないため、定植前マルチが可能である(表1)。

### 3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本試験は128穴セル苗を使用している。
- 2) マルチを被覆したところに定植する場合、活着を促進するため土壌に水分を多く含ませておくことが必要となる。
- 3) 「ひたち1号」は県育成品種であり、品種登録出願中である。

#### 4. 具体的データ

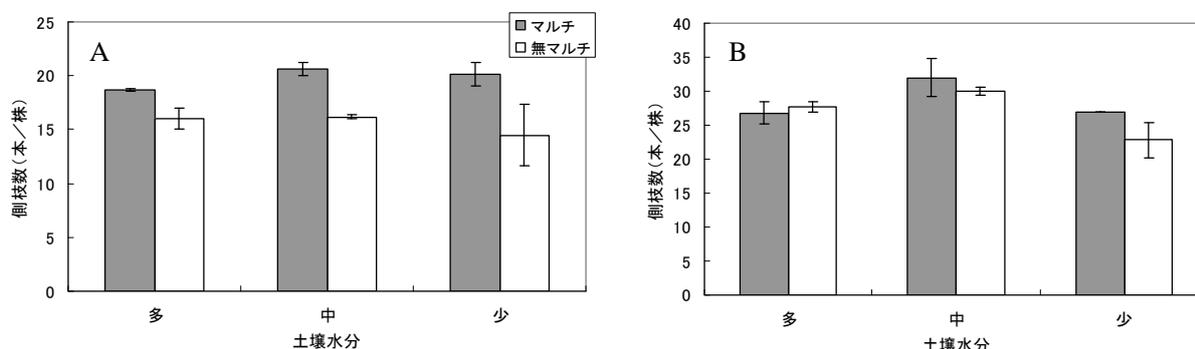


図1 マルチの有無と土壌水分が生育に与える影響

A: 定植後2カ月の7月における側枝数      B: 定植後3カ月の8月における側枝数  
 側枝数: 販売可能な葉がついている枝、      バーは標準誤差を示す(5株2反復)  
 かん水開始点: 多 pF1.8、中 pF2.2、少 pF2.6  
 かん水量: 6~8月平均(L/株/月)、多 11.1L、中 5.0L、少 0.6L  
**【耕種概要】** 品種「ひたち1号」、播種 H21.4/24、育苗 128穴セル、定植 5/22、  
 株間 20cm 条間 30cm 2条千鳥 1本植え、施肥は耕種基準に準ずる、  
 マルチ 黒マルチを使用、被覆時期 定植前、  
 定植後1週間は散水チューブによるかん水、水分制御 6/1~

表1 マルチの被覆時期が生育に及ぼす影響

	草丈(cm)	主枝節数	側枝数 <sup>1)</sup>
定植前 <sup>2)</sup>	37.1±2.4 <sup>3)</sup>	11.1±0.2	17.3±4.4
定植後	40.0±2.3	11.2±0.3	15.5±3.6

- 1) 収穫可能な葉がついている側枝
- 2) マルチの被覆時期 定植後: 定植約1ヵ月後
- 3) 標準偏差 (n=6)

**【耕種概要】** 品種「ひたち1号」、播種 H20.4/14、  
 育苗 128穴セル、定植 5/14、株間 20cm 条間 30cm  
 2条千鳥 1本植え、マルチ 黒マルチ使用、  
 定植後1週間は散水チューブでかん水、  
 水分制御 5/22~、かん水開始点 pF2.2、  
 土壌水分6~8月平均(L/株/月) 6.2L

#### 5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

現場ニーズ把握と新技術の迅速な普及のための調査事業・平成20年度・園研野菜研究室